月を踏む

湯の底に、月が沈んでいた。

橙色の、まん丸い月だった。指を差し入れると、光は皮膚の上で砕け、露天風呂を囲む岩も、頭上の竹格子も揺れた。跳ねて、落ちて、また跳ねる。私はその線を知っていた。病室で見つめつづけた線だった。

十一月末の嬉野は、六時を回ればもう夜だった。胸までつかっていても、湯から出た肩を夜気が冷やした。湯口の音が、人気のない庭へ澄んで響いていた。

夫が亡くなったのも、昼と夜の境が消えてからだった。

個室には夫と私がいた。あとは機械の音だけだった。白いシーツの上の手は、結婚したころよりひと回り小さかった。包むと、まだ温かかった。

「どちらが先でも、恨みっこなし」

そう言い合ってきた。五十年も一緒にいれば、楽しいことも腹の立つことも、だいたい半分ずつになる。子どもは育った。孫もできた。行きたかった所へも行った。もう欲張ることはない。

「向こうで待っとって」

「おまえは道草するけん、待ちくたびるばい」

そんな話をしたころ、死は縁側の先にかすむ遠い山だった。

病室で私は、十分だった、と何度も唱えた。ところが夫がいなくなると、家には私までいなくなった。

脱ぎ散らかす人がいない。新聞を広げたまま眠る人も、湯飲みの底に茶を残す人もいない。洗濯籠は軽いままで、ご飯は少し炊いても余った。

朝は目が覚めても、布団を出る理由がなかった。カーテンを開けないまま夕方になり、郵便受けの音がすると顔を上げた。夫がもういないことを、そのたび思い知らされた。

味噌汁を作ろうとして、鍋を棚へ戻した。一人分の量が分からなかった。向かい側に椀のない食卓にも、まだ慣れなかった。夫は味が薄いと言って、醤油を二滴垂らした。三滴では辛いらしい。そん

なつまらない加減ばかり、指が覚えている。
仏壇に供える飯は炊けた。冷えて硬くなるころ、それを捨てた。夫を一日に一度ずつ捨てているようだった。
息子から電話が来ると、食べた、眠れた、と答えた。平気な声ばかり、うまくなった。
とうとう息子夫婦が家まで来て、私を嬉野へ連れ出した。後部座席では孫娘二人が絶えずしゃべり、私は相槌を打つだけで済んだ。窓の外を、丸く刈りそろえられた茶畑が流れていった。夫がいたら、きれいに刈っとる、と身を乗り出しただろう。旅館に着くと、姉が妹の浴衣の帯を結び直した。
「曲がっとるよ」
「お姉ちゃんのも曲がっとる」
二人が吹き出す。夫なら、どっちも曲がっとるばい、とからかっただろう。私は笑えず、脱ぎ散らされた草履をそろえた。
「ばあちゃん、まだ？」
戸の向こうから、明るい声がした。唇が動いた。声にはならなかった。
あのときも、その声が廊下から駆けてきた。
間に合わんかもしれん、と息子が知らせたのだ。孫たちは制服のまま病室へ飛び込み、おじいちゃん、と呼んだ。閉じていた夫のまぶたが、ほんのわずか持ち上がった。そう見えたにすぎないのかもしれない。
緑の線が高く跳ねた。夫の指を握った。
「向こうで待っとって」
私が告げると、夫は長く息を吐いた。それが返事だったのか、最後の呼吸だったのか、いまも分からない。線は一本になった。医師が時刻を告げても、手を離せなかった。甲の薄い染みも、曲がった小指も、触れているのに遠かった。
「ばあちゃん、いる？」
戸越しの声から、明るさが消えていた。
足先で湯を押した。竹格子の心電図が激しく脈打ち、月は砕けて火になった。火葬場の小窓の奥で、夫を包んだ色だった。

足が止まった。
波が石に当たり、私の膝へ返ってきた。
「おるよ」
湯気を抜けた返事が、戸の向こうに届く。
「今、行くけん」
踏み出すと、火も線も脚のまわりでほどけた。
手すりをつかんで立ち上がる。雫が首から腹へ、細い脚へ流れ落ちた。鏡なら目をそらす皺もたるみも、七十三年使ってきた私の体だった。
息子は、一緒に暮らさんかと言う。返事はしていない。家を出るか。夫の服を片づけるか。湯飲みをしまうか。明日でなくてもいい。決めないまま過ごせる日が、まだ私にはある。
脱衣所では、孫たちが髪を乾かしながら頬を膨らませていた。
「遅い。お腹すいた」
「私も」
答えたとたん、腹の底が鳴った。三人で吹き出した。
夕餉には温泉湯豆腐が出るという。白くほどける豆腐を、今夜は自分の椀によそおう。夫が好んだ虎之児も、一合頼もう。
着替えを済ませ、女湯の暖簾をくぐった。二人が手を差し出す。
私は両手で握った。
背後で湯の音がした。
振り返らなかった。

（了）